

民俗学資料の基礎情報分析

亦野 あゆみ, 宮田 登 (神奈川大), 八重樫 純樹 (静岡大)

[要旨]

本論は、民俗資料の情報化をのための第一段階として、民俗学における情報化の流れと民俗資料の特徴について考察している。ここでは、以下のような項目で隣接分野との比較も行い、民俗資料の特徴の輪郭をより明確にする試みもおこなった。

- ・ 1 章 本研究の位置付け
- ・ 2 章 民俗学資料情報化の研究経緯
- ・ 3 章 民俗学での研究対象とその性格について
- ・ 4 章 隣接分野の資料や情報化の研究との比較
- ・ 5 章 今後の研究方向について

A study on Fundamental Information Analysis for Folklore Objects

Matano Ayumi* Miyata Noboru* Yaegashi Junki**
Kanagawa University*, Shizuoka University**

In this paper, by achieving the goals listed below the characteristics of the Japanese Folklore objects have been clarified so as to facilitate further developments for informationalization in the field.

The goals are:

- 1.to clarify the problem for this study,
- 2.to review the related literatures,
- 3.to clarify the objects of Japanese Folklore,
- 4.to compare the way of informationalization of primary sources in Japanese Folklore with that of Japanese history studies and archaeology studies, and
- 5.to clarify the conclusion of this study and implication for further studies.

1. はじめに

本論は、人文学分野のひとつである民俗学の民俗資料の情報化に向けての一考察である。日本における民俗学は、柳田国男（1875 年～1962 年）によって創設された、比較的新しい学問分野である。民俗とは、民間伝承という言葉に置き換えることもできるが、その言葉の通り民間に伝えられてきた様々な習慣を研究対象としている。

民俗学は、日本文化の全体像を明らかにするためには、その文化の基層、その時代を代表するのではなくむしろ先祖から受け継いだ生活を守り続けているような、その伝承者である「常民」の日常生活のあり方も明らかにする必要がある、という立場をとっている。そのため、民俗・民間伝承を研究対象として、それらのもつ意味について分析を行い、生活文化を再構成することをその学問の目的としている。学問分野としては新しいといえる民俗学であるが、その報告書は日本各地で市町村単位での生活習慣やお祭などの行事の記述から存在し、毎年無数の報告書が出版されている。そのため膨大な量の報告書が存在している。前述では研究対象は民間伝承である、と述べたが民間伝承には後にも触れるように、鉾や桶などの民具から、年中行事、信仰に至るまで、対象となっている範囲は非常に広い。そのため、民俗学で対象とする資料は多く、報告書も膨大なのであるが、これらは残念ながら統一された基準の中で、整理、活用されているとはいえない状態にある。

しかし、日本各地の民俗事象の比較検討は、民俗学の初期の段階から意識されており、その中には、現在の情報化の前提となるような統一された基準での資料の収集も視野に入っていたはずである。しかし当時はコンピュータや情報化という考え方もなく、現在の情報化の考え方とは必ずしも一致しているとはいえない。

現在のパーソナルコンピュータの普及やそ

の性能の向上を考えると、民俗学の分野でのコンピュータ利用も検討する段階に充分来ていると思われるが、民俗事象の比較検討等の研究利用を目的とした民俗資料の情報処理あるいは情報化についての活動は活性的ではない。これは、情報化を必要としていないのではなく、情報化（資料の比較検討）を意識しつつも資料の収集方法や研究そのものが基本的に個人を単位として行われているため、情報化の前提条件である同一の視点による資料の収集が非常に困難であることが大きな原因と考えられる。しかし組織的に民俗資料を収集した例がないわけではなく、文化庁の「日本民俗地図」、国土地理協会の「日本祭祀地図」等がある（[1]、[2]）。しかし、これら进行研究に利用している例は少ない。また先ほども述べたが民俗学が“資料”として対象としているものは、隣接分野である歴史学や考古学などと比べて非常に範囲が広く、またその量も膨大である。民俗学の間口の広さが、民俗資料の情報化（共有化）をさらに困難にしているといえるだろう。

現在の民俗学では情報化はどこまで可能なのか、また民俗学資料の情報化の問題点はどこにあるのか。これらの問いを念頭におきつつ、まずは民俗資料を情報化するために基礎となる資料を集め、現状を把握し問題点を抽出していくことを本論のねらいとしたい。

2. 民俗学資料情報化の研究経緯

先述したように、統一された規格の資料を用いた民俗事象の比較検討は柳田国男や和歌森太郎らによって以前より意識されてきたことである。（[3]、[4]）しかし、データベース化を意識した上での民俗資料の情報化についての研究は、残念ながらそれほど多いものではない。実用化されているデータベースとしては、平成 2(1990)年より国立歴史民俗博物館の民俗誌データベースが公開されている（[5]、[6]）。ここには、

①個人、大学、教育委員会などの調査報告書、

②民俗編等を含む県史・市町村史、

③地元の郷土史家による、郷土誌

が平成 7 (1996) 年 3 月現在で、5,203 件登録されている。

このデータベースは調査開始に当たっての地域の文献情報の収集と、日本の村落の比較研究のための研究支援を目的として作成されている。しかし、ほぼ基本的な民俗誌が網羅されているのは、9 都府県のみであり、他は追加作業が続いている状況である。さらにこのデータベースは、各報告書に記録された内容の検索まで対応している訳ではないため、民俗資料データベースというよりは民俗文献の目録データベース、という印象が強い。

また国立歴史民俗博物館では昭和 63 (1988) 年に民謡の分類法とそのデータベース化に関する総合的研究を行っている。これより以前、昭和 54 (1979) 年から文化庁の補助事業として、日本全国を対象に民謡緊急調査が始められていた。この調査の結果、平均約 1,000 曲、全国で約 4 万曲の民謡が収録された。

民謡データベースは、この時の資料を元にこれらをデータベース化し、民謡の分類法の確立をめざしたものであった。具体的には、文化庁が各都道府県に示した民謡緊急調査票のフォーマットを検討し、民謡データベースに適合した台帳を作成する。そしてそれに基づいてデータの試行作成を行った ([7])。しかし、日本民謡の研究において、誰もが納得するような確立した分類法が未だ無い ([8]) こと、民謡データベースの目的の明確化と、その目的に見合ったデータ作成がデータ作成素材 (民謡の緊急調査の結果) から可能か ([9])、という大きな問題に阻まれ、コンピュータへの入力用台帳も様々に検討された結果、実用段階までは至らなかったようである。

民俗資料のデータベース化の試みとしては、年中行事資料を例に松本浩一、古家信平による研究がある ([10])。ここでは民俗資料をデータベース化する際の問題点をいくつか提

起している。ひとつは、民俗語彙の扱いの問題である。例えば方言の様に、同じ言葉でも指している内容が地域によって違うという場合にこれをデータベース上どう表現するか、ということである。民俗語彙については、民俗学の初期の段階からその整備が進められており、昭和 10 (1935) 年から約 10 年にわたって分類習俗語彙集が刊行されている。この中の語彙と各地の語彙との対応には、民俗語彙辞典のようなものを新たに作成することでデータベース作成者と検索者の言葉の概念を統一することが望まれるとしている。さらに、報告書の記述の内容に関する問題点が挙げられている。記述されている行事が、いつの時点で見られたものなのかがはっきり示されていない報告書が多いと指摘されている。これを明確にすることは重要であるにもかかわらず、現在も実際に行われているのか、伝承者が過去に体験したものなのか、あるいは伝承者自身伝え聞いたことなのかも区別されていることはあまりない (前出)。これは現状でも同様である。また文献 [11] でも民俗、歴史、考古資料のサンプルデータを作成し検索実験の中で、民俗資料について同様の問題を指摘している。また文献 [12] では、「とくに情報化とは概念の共通化という問題を含む場合と関連してくるため、データの「個人性」と「共通性」の認識を明確化しにくい場合が多く、したがって課題に対する事前検討と概念認識範囲の設定が必須である。」と、情報化に関する基礎的な分析の重要性を述べている。

3. 民俗資料とは

ここでは、民俗学で研究の対象としている資料の範囲について考察する。

文化財保護法による「民俗資料」の定義では、「衣食住、生業、信仰、年中行事に関する風俗習慣、及びこれに用いられる衣服、器具、家屋そのほかの物件で、わが国民の生活の推移の理解の為欠くことのできないもの (以下「民俗資料」という)」としている ([13])。

一方柳田国男は民俗資料を以下の様に3分類している。

第1部 有形文化（住居、衣服、食制、漁業、林業・狩、農業、交通・交易、贈答・社交、労働、村組織、家族、婚姻、誕生、葬制、年中行事、神祭、舞踊・競技、童戯）

第2部 言語芸術（命名、言葉、童謡、諺・謎、民謡、語りもの、昔話、伝説）

第3部 心意現象（妖怪・幽霊、兆・占・禁・呪、民間療法）

これらは、伝承を記述する際の基準として考案されたものであり（[3]）、現在はそのまま利用されてはいないが、基本的な基準となっている。

民俗学では、研究のために上記のような資料を実地調査によって収集を行う。資料の収集は、基本的には伝承者に面接して聞き取り・聞き書きを行うことが中心となる。実地調査は研究者個人を単位としてそれぞれの研究の関心に沿った形で行われるのが通常である。しかも資料は民具のような「もの」だけでなく、伝承者という「ひと」から研究者という「ひと」が話を聞く事によって得られる性質のものもある。この聞き取り・聞き書きによって得られた資料は、第三者による追実験が困難である。これも、民俗資料そのものが「共有性」より「個人性」の強いものになる原因である。しかし、現在は日本民俗地図の様に特定の問題を設定した上で多数の参加者による大規模な調査も行われるようになっている。ただし、日本民俗地図の作成は文化庁の文化財保護を目的とした事業であり、民俗学の研究目的でないために、その後の利用が難しいという指摘が多くある（[14]）。

また各地で報告された伝承・民俗事象を比較検討し、日本文化の基層を探るという試みは柳田国男の『蝸牛考』をはじめ、早くから意識されている事だった。さらに、昭和60（1985）年から6年間にわたって国立歴史民俗博物館で特定研究『日本歴史における地域

性の総合的研究』のひとつとして「民俗の地域差と地域性」の研究を行っている（[15]）。この研究代表者であった、坪井洋文は、日本歴史の総合的・体系的把握のためには、こうした日本の社会や文化の地域的多様性を踏まえた歴史認識が不可欠である（[16]）とし、歴史・考古・民俗の3分野による総合的分析を計画した。民俗学では地域差と地域性を研究課題としたが、地域性の概念について共同研究者の中で統一された見解を持つことができず、十分な成果をあげることができなかった（[15]）。地域性に関する見解の違いは、民俗学の中でその認識がいくつかの系統に分かれていることを意味している。民俗学として地域性をどうとらえ体系だてていくかの見通しは現在もたっていない（[17]）。

こういった研究利用を目的とした情報化の試みとは別に、博物館での民俗資料の整理、管理を目的とした情報化の試みも進められている。こちらに残念ながら、統一された分類での整理が各博物館共通で行われているといえない状況である。

4. 民俗資料と隣接分野の資料との比較

民俗学が研究素材としている資料の範囲の広さは先述のとおりだが、隣接分野である歴史学、考古学で研究対象としている資料との比較からそれぞれの性格と違いを考察したい。

まず歴史学では、研究の素材とする史料は通常、古文書、古記録、編纂物に加えて寺院に伝来する聖教、経巻、典籍類、絵画史料としての絵図、絵巻等に大別されている（[18]）。そしてそれら多様な形態をもつ個別の史料とその伝来過程で形作られた個別史料の集合体である史料群を基礎として日本史研究が実現している（[18]）。前掲の論文では、コンピュータ処理を前提としての史料分類を次のように提示している（表1）。これらの史料は、史料所蔵者への採訪を初めとして、影写、謄写本や写真帳を所蔵する諸機関などでの調査、時代史料、地域史料を収蔵する史料集の通覧

等の方法で収集が行われる。さらに、編纂業務としてそれらの史料を解説する事で史料原文を翻字し、史料原稿をその体裁のまま、もしくは割裂、配列し、付註する事により、研究に活用できる新たなテキスト（史料集）として活字化する。

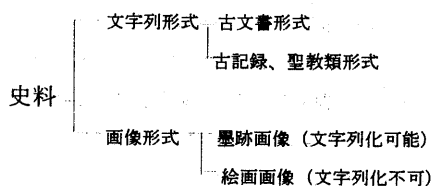


表-1 (文献 [18] より)

民俗学と比較すると、歴史学は基本的に有形資料を研究の素材としているといえるだろう。民俗学の聞き書きによる資料のような再現性の不安定な素材はないといえる。また研究素材の範囲が、量はともかく、明確であるので上記のようなコンピュータ向けの分類まで情報化を進めることができている。個々の史料の内容に関する情報化はまだ先の問題になるにしても、どのような史料の所在をあきらかにするデータベースを作成する事は大半の歴史学の研究者の助けになるであろう。

一方考古学では、発掘調査による資料の収集が行われている。研究素材となるのは、発掘調査で出土した遺構、遺物である。しかし、遺構については形状や規模が千差万別であり、また性格不明の物も多く、分類基準を確定することは容易ではない([19])。また遺物についても同様で大きさ、材質、完形か破片か、一括資料か否か等のさまざまな異なる要因が存在しているため([19])、分類、記録方法も統一基準をもうける事は困難のようである。

また、発掘現場は特に地層が幾つも重なる沖積地の発掘調査では、ある地層を除去しないと次の地層にかかれなために、記録作業等の迅速化が強く要求される。さらに行政が行っている発掘調査のほとんどで現物と（遺跡の上で）照合しながら記録が作成出来る機

会は1回に限られるため、発掘現場での記録作業はまさに時間との闘いとなる。このような状況のため、本来調査現場で処理されるべき内容をそのまま袋詰めにした内容物が安全に保存されていたとしても、それをとりまく環境はすでに失われており、考古学で重視される「諸関係」の一部は消失している。また、後の段階での再整理も、当初予想した通りに行える事は少なく、再整理までの間に情報が失われることもある([19])という。

考古学も、研究素材とするものはいわゆる有形資料ということになるが、分類が困難である点が歴史学とは違う点である。収集した資料の分類が困難であるのは、民俗学と共通するところがある。また記録の迅速性が指摘されているが、これは実地調査を行うところでは民俗学も歴史学も共通の問題点といえるだろう。

文献 [12] では、その研究の中で全ての歴史的事象は時間と地理的空間のうえに存在しているとし、つぎのような事象空間モデルを提示している。これを元に再度民俗学と隣接分野のそれぞれ対象とする資料を整理してみる。地理的空間については、考古学の場合地下に埋まっているものを発掘するため、発掘の場所、遺物では遺跡のどのような所から発掘されたかの情報が必要とされる。民俗学では、民具を例にとると、採集地、使用場所の2つが必要不可欠な情報となる。時間軸では、考古や歴史の資料は固定されたものと考えられる。一方民俗学の資料は、現代に近い物を扱うため常に変化しており、地域的な伝播、伝承や民具の系譜をたどることが難しい。

5. おわりに

以上民俗学における民俗資料の情報化へむけて、これまでの民俗資料の情報化の試み、民俗資料の定義、隣接分野との比較をまとめた。民俗学で研究対象とする資料（素材）は、他の隣接分野よりも範囲が非常に広く、またその量も膨大である事がわかっている。また、

資料を整理する分類等の整備のめどもたっていない。しかし、人文学のなかでは情報化・コンピュータ化のすすんでいる考古学の資料と分類が困難である点、再現性の低さ等の共通点がある事が分かり、考古学での情報化の手続き法を民俗資料の情報化の手がかりとする事が出来そうである。最後に民俗資料の情報化の展望を埋蔵文化財業務サイクル(〔19〕)をもとに考察したい。第1段階の発掘調査は、民俗学の実地調査に置き換えることができる。これは、この基本整理を行うのは、調査を行う研究者、または博物館などになるだろう。第2段階の資料整理・分析、報告書の作成は民俗学でも同様に行われる作業である。第3段階の保存・管理、利用も考古学の場合と同様に考える事が出来る。

民俗学の資料を情報化する事は、研究者だけでなく、生涯学習、地域教育などの社会教育に応用する事ができると考えられる。今後はこのような資料を情報化することで何が可能になるのか、情報化の先にあるものを念頭におきつつ考察を進めて行きたい。

<参考文献>

- [1] 文化庁 1969 『日本民俗地図』
- [2] 和歌森 太郎編 1976 『日本祭礼地図』
国土地理協会
- [3] 和歌森 太郎 1949 「民俗学の方法について」
民間伝承 第13巻 第4号
- [4] 柳田 国男 1935 『郷土生活の研究法』
刀江書院
- [5] 国立歴史民俗博物館 1996.3 「データベース
れきはく」サービス案内
- [6] 国立歴史民俗博物館 1990.4 「データベース
れきはく」検索のてびき民俗誌データベース
- [7] 久万田 晋 1989 『民謡の分類法とそのデータ
ベース化に関する総合的研究』
文部省科学研究費補助金総合研究(A)
(代表 小島 美子) 研究成果報告書
- [8] 金城 厚 1989 「民謡データベースの条件と
課題」『民謡の分類法とそのデータベース化に
関する総合的研究』 文部省科学研究費補助金
総合研究(A)(代表 小島美子)研究成果報告書
- [9] 八重樫 純樹 1989 「民謡のデータ構造に関
する基礎的考察」『民謡の分類法とそのデータ
ベース化に関する総合的研究』
文部省科学研究費補助金総合研究(A)
(代表 小島 美子) 研究成果報告書
- [10] 松本 浩一・古家信平 1990 「民俗資料デー
タベース化の試み 一年中行事資料を中心として」
『情報処理学会研究報告』90-72
- [11] 八重樫 純樹・倉田 是 1991 「事例データ
をもとにした情報検索実験といくつかの課題」
『国立歴史民俗博物館研究報告』 第30集
- [12] 八重樫 純樹 1991 「歴史系支援情報処理研
究の課題」 『国立歴史民俗博物館研究報告』
第30集
- [13] 祝 宮静 1980 『民俗資料入門』
民俗・民芸双書63 岩崎美術社
- [14] 大塚民俗学会 1975 「昭和49年度大塚民俗学
会年会 シンポジウム 民俗地図をめぐる」
『民俗学評論』第13号 大塚民俗学会
- [15] 小島 美子 1992.3 「民俗の地域差と地域
性」研究の課題と研究経過 『民俗の地域
差と地域性1 特定研究「日本史における地
域性」成果報告-1』
国立歴史民俗博物館研究報告 第43集
- [16] 「民俗の地域差と地域性」研究班 1987.3
『民俗の地域差と地域性 -中間報告1-』
国立歴史民俗博物館
- [17] 岩本 通弥 1993.11 「地域性論としての文
化の受容構造論 -「民俗の地域差と地域性」
に関する方法的考察-」 国立歴史民俗
博物館研究報告 第52集
- [18] 永村 真 1991 「日本史資料研究におけるコ
ンピュータの利用分野」
『国立歴史民俗博物館研究報告』第30集
- [19] 八重樫 純樹編 1997 「土偶情報の高次学術
応用に関する実証的研究」平成6年度~8年度
文部省科学研究費補助金(基盤研究(A)(1))
研究成果報告書